

キリマンジャロ登頂(アフリカ最高峰)

1989年12月23日から1月2日 11日間

西遊旅行社ツアーハウス

参加者十二名

十二月二十三日(土)

晴

十六時二十分、パキスタン航空 ジャンボ ジェット機 PK763
便で成田空港を出発。マニラ、バンコク経由カラチ空港
着、PK744便に乗り換へ出発した。

窓から下を覗くとルブアリハ砂漠がどこまでも続いていた。
アブダビからは、アフリカ大陸の広大な原野が続き広さにあらため
て驚嘆した。ケニアのナイロビ空港に、二十四日(日)十五時五十
分に着いた。約二十時間の長旅である。

十二月二十五日(月)

晴

朝、ナイロビ市内のホテルをワゴン車二台で国境の町ナマン
カに向かった。車がポンコツで何処まで続く一本道の道路も悪くか
タがタゆれて落ち着かない。おまけに100KM位のスピードをとばす。
道の両側は、自然公園になっていて広い草原がどこまでも続い
ている。キリン、駒、鳥などの姿を見ることができた。

ケニアからの出国、タンザニア入国の手続きを済ましキリマンジャロの
登山基地、キボホテルに着いた。

十二月二十六日(火)

晴後雨

朝、ガイド、ポーターと打ち合わせの後、ワゴン車二台で登山
事務所のあるマラングゲートに着く。ここで登山屋、登山料も払
うらしいを終り登山を開始する。

荷物は、ポーターが二人分 約20KGを麻袋に入れ頭の上に載せ
軽々と登っている。始め自動車の通れるくらいの道を登る。

道の両側は樹林帯で熱帯の高木が生い繁げつてゐる。珍しい草花も目を楽しませてくれる。小鳥の囀る声もさかんに聞こえるがなかなか姿を見せない。珍しい高山蝶も見かけた。

欧米各国からの登山者が多い。下山する人とすれ違う現地人は、明るくシャンボ(今日は) ジャバナン ガンバレーなど世界各国の言葉が聞かれた。日本人も多く今回三、四のツアーの団体に会つた。

單独で下山する日本人の話では、高山病と天候も悪くギルマンポイントに登れなかつたそうだ。

やがて赤きのせまの登山道に変わり、しばらく登山と草原に出た。今まで晴れていに空が急に曇り出し、遠くで雷が鳴ったかとおもうと急に雨になり大粒の雨になり本降りになつた。登山道はあつて間には泥水の川になつた。傘をさしても下半身 泥水ごくしょねれになる。私は樹木の下で雨宿りをする。十分位で小降りになり出発した。林の中をしばらく登山と芝原の中に三角屋根の山小屋が八、九棟現れた。

ここが今晚泊まる山小屋だ。マラングハット 2690Mである。四時間で着いた。一番大きい建物の二階の二段のベットの上を確保する。五時明かりうちは下の食堂で夕食を食べる。スープ、パン、バター、野菜の煮つけ、肉のバター焼き、デザートなど。食後はやわに就寝した。

十二月二十七日(水)

曇後雨後曇

朝食後、パン、バター、オレンジ、小さい桃二個の弁当を受け取り出発した。始め泥の急斜面の登山道を三十分位登ると樹林帯が無くなり廣い草原帶に変わり視界が開けてきた。

はるか前方に、キリマンジャロが見えてきた。残念ながら頂上は雪にかくれていった。右側が山になつていて、山腹の緑の谷の登山道を進む。いくつかの谷を越えて登つた。途中 日本の山で見かけるマツムシ草に似た花が咲いていた。その他多くの熱帯の高山植物が珍しがつた。途中雨が降り止むがすぐ小降りになつて止んでしまつた。二、三回休憩に登つているうちに、三角屋根のある山小屋に

着いた。ここが、マンタラハット 3750M 富士山と同じ高さだ。

十二月二十八日 (木)

最後巣

始め、二十度位の斜面をしばらく登る。水分の多い湿原を水たまりをよけて歩く。二時間位登ると最後の水場が角だ。飲んでみると、なま温かく日本の山の水のようにおいしくはぬがった。ポーターは、大きなボリタンクに水を入れてこから運んでいた。

休憩して、弁当の一部を食べる。ポーターの持っている荷物を頭の上に載せてみる。とても重くて歩けたものではない。外人も面白がって頭上に載せ写真を撮つて喜んでいた。

いくつかの山を降下すると砂石礫が何枚も積もる広大な緩斜面に出た。ここが山渓などの字車で見た場所だつた。

車は全然生い立つなかつた。見えるのはすゞキリマンジロは雲でかすががつに見えなかつた。そのうちに雲が降り出し急に気温が低くなつた。あわててオーバースポンを着て手袋を着ける。長々長々かレザーカーを歩つていつうちに一面雪白になつた。しばらく待つと右前方に山の雲が見えてきた。

近いと思つたのに、そこから二時間かかるといつた。最後の山が近くなり斜面が急になり呼吸が苦しくなる。がんばつて最後の山の雲に着いた。

六時間で登つた。ここがキボハットタクタの山だつた。

疲れもあり、明日の登頂のことを考えベットの上にシラフを出して休養した。何時か間にか頭痛が始まり、胃腸もむかむかしていた。

十六時頃、日本から持つてきたうどん、味噌汁の夕食になつた。食欲が無いので味噌汁だけどうにか飲んだ。これが高山病だと考へ明日の登頂が心配になつた。

添乗員が心配して酸素を吸わせてくれた。十分位で気がついたまゝ少しは治つたが、しばらくすると頭痛が始まり眠れないまま時間が過ぎた。

十二月二十九日(木)

晴

眠れないで高山病で苦しんでいるうちに出発の一時がせまってきた。同行のみんなは、ヘットランプをつけてゴソゴソ出発準備を始めた。私は、「部屋で待てます。」と力無く添乗員に言って登頂をあきらめた。「登つているうちに治る人も居るのでお参りみよう。」と、はげまされた。あわてて出発準備をして登山の列の最後に加わった。ガイドは、ところどころカニテラを持って列に入っている。ヘットランプを着けていても暗くて登山道がよく見えなくて苦労する。体調が悪くどんどん列から離れてしまった。

最後に、同行の女人人とガイドの三人になってしまった。少しずつかんばって登つていてるうちに、女人人が座りこんで苦しそうに口を開いてしまった。しばらく休んで登頂を続ける。ヘットランプの電池がきれてしまつたので二人分交換する。登山者のタリは、はるか上方で火が点々と小さくなってきた。女人さんは、少しずつ遅れて登らなくて休息でいい。ここまで来た以外にないと考え少し登つては、ハアハア呼吸を繰りかねばなる。だんだん急斜面になり登山道は電光型に斜面登行になってしまった。ますます息苦しくなってくる。十メートル位登る度にハアハア言ひながら休む。八号位まで登った時私の登山道をヘットランプで照らしてくれていい人が居た。その人に追いつこうと必死で走り張つた。

やがて、東の空が明かり下がってきた。どうにか御幸先を写真におさめる。はやく前の人へ追いつこうとあわてて太陽が昇る前にそこは写せなかつた。ようやく追いついてみると添乗員の柳田さんアカツの不思議な頭痛もやくななり元気があて名場の道を三、四回斜面登行を続けようやくギルマン・ポイント 5695M の二番目の火口壁の頂上に着いた。大きな岩の上にポールが1本立つていた。

同行の栗原さんと他の登山者四人で記念写真を撮り休憩した。火口壁の向こうには、氷河が有りウルフピーク 5985M の方は雪で真白な火口壁が続いていた。

降りは、体調もよくなり富士山の須走りのように、まっすぐ下へ

砂礫を降り、二時間でキホハットに着いた。少し休憩してホロホロハットへ下山した。

十二月三十日 (土)

晴

登山基地、マラング・ゲートまで下山した。次の時パラフライダーを持った日本人二人の青年に会った。「内緒だよ」と言つてたので無用けだったらしい。同行の人の話では、銃砲を持った警察がおり罰金 2000 ドルとされたそうだ。
車でキホホテルに着き荷物をまとめた。世話になつたカトリドニ、説教人ヘットランフ、帽つきあり必要のない物をあげた。
別れをつげ車でアリューシャのホテルに着いた。

十二月三十一日 (日)

晴

ワゴン車で国境を通りナイロビ空港からカラチに向かった。

一月一日 (月)

晴

カラチ発の航空機 1 時 45 分なので、エアポートホテルで夜眠し、カニ釣り、バザール、博物館を見学した。

一月二日 (火)

晴

十二時二十分、無事 成田空港着

コースタイム

- 1/26.(火) キボーホテル 9:00 → マラングゲート 9:20 → マンタラハット 13:00
 1/27.(水) マンタラハット 7:40 → ホロンボハット 10:00
 1/28.(木) ホロンボハット 7:30 → キボーハット 13:00
 1/29.(金) キボーハット 1:00 → キルマンポイント 7:00
 1/30.(土) マンタラハット 10:00 → マラングゲート 12:00 → キボーホテル 12:40

